

人・街・ながた 震災資料室ニュース

2008. 11. 17

発行人 寿 広文

編集人 武川泰恵・藤原美紀

論文

「記憶からたどる阪神淡路大震災の復旧活動」

～神戸市長田区役所職員の聞き取り調査から～

当資料室の資料整理をしてくださっている神戸学院大学水本ゼミの学生から「区職員の記録が少ない」との提起を受けて、当時の職員への聞き取り調査が始まった。震災後13年という歳月は物事を冷静に見つめ直すには適当であった。退職者への聞き取りも終わり論文は完成する。

①自身の被災状況や ②担当した仕事など、7項目について28人に、それぞれ1時間半にわたって調査を行った。

論文は第2章で「危機への対応」を述べており10日目までの出来事が記され、第3章は「組織変更」で皆でがんばろうと言える体制づくりが記されている。続いて第4章で2万人のボランティアを派遣した「自治労による支援」で組織ボランティアの特性が挙げられている。

最後には「職員の教訓」や「今後、大災害が起きた時」の対応がまとめられている。

テープを文字起こした原稿に「職員はどの部分を修正するのか」のユニークな章もある。

秋の震災資料室展

アンケート紹介

1. 展示を見られた感想

- ・映像展示が良かった。
- ・視覚的に訴えるほうがわかりやすい。
- ・当日のことを思い出し今更のようにすごかったと思います。胸がいっぱいで感想というよりも…改めてよく乗り越えられたなあと多くの支援に感謝です。

2. 災害に対する備えは？

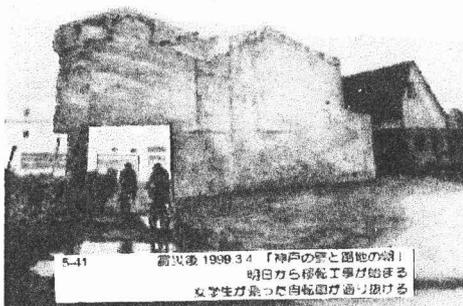
- ・水を置いている程度。
- ・1人2リットルの水と少々の食糧の蓄え。
- ・いざというときの避難場所。
- ・正直、当初の気持ちがかんたん減っています。食糧の備蓄と遠方に住む家族の連絡の取り方を決めています。

3. その他、何かありましたら...

- ・地震後の活動は風化があり苦勞されると思いますが、後世に継承して行ってほしい。
- ・今までに心の中で避けていた部分がありました。立ち止まることの大切さ、自分しか見えなかったけれどもまわり（さまざまな校区）の様子もわかり、訪ねてよかったです。でもやはり重い心は残ります。助けてくださった他府県の皆さんに改めて感謝します。

神戸の壁絵図展

'09年1月13日 PM2:00～16日
長田区役所区民ギャラリー



主催：リメンバー神戸プロジェクト
共催：人・街・ながた震災資料室
問い合わせ：090-4302-8231（三原泰治）

真陽小学校区の人口動態

1927(S3)年には児童数日本一、3,691人 ——— 4回の国勢調査を比較して②

	1965年	1975年	1985年	1990年	1995年	2000年	2005年
西尻池町3・4・5	1,386	538	556	415	234	324	291
若松町3・4	1,706	1,048	745	563	37	456	918
大橋町3・4	801	443	459	313	330	352	499
腕塚町1~4	2,156	1,447	1,146	1,026	583	941	886
久保町1~4	2,169	1,696	1,266	1,109	709	996	980
二葉町1~4	3,338	2,485	1,898	1,744	1,113	1,152	1,026
南駒栄町	42	80	37	48	256	36	34
庄田町	2,975	2,241	1,587	1,471	1,177	1,132	1,023
駒栄町	2,299	501	327	252	222	166	119
合計	16,872	10,479	8,021	6,941	4,661	5,555	5,776
区合計	214,345	185,974	148,590	136,884	96,807	105,464	103,771

震災当時2,300人が避難していた真陽小学校区は新湊川の西岸からタンク筋までで国道2号線より北は若松町(1~3丁目)と大橋町(1~3丁目)である。

真陽小学校は長田(林田)区で最初の小学校で1927年には日本一の児童数であった。我が国が高度成長期に入るとともに人口減が著しくなり、'65年から'85年の20年で半減した。その後、震災で更に減少したが、復興住宅等の建設で微増に転じて今日に至っている。

この地区の震災による特徴は2つある。1つは若松町が'95年に37人まで減少したのは火災被害によるものと、再開発事業である。2つ目は南駒栄町の'95年の256人である。100人未満の街が急増したのはテント村の出現である。この街も復興住宅等の建設に伴い、従前の状態に戻っていった。西尻池町の減少は既に進められていた阪神高速湾岸線の工事によるものである。

今、手元に関心を呼ぶ資料がある。'95年2月23日に行った真陽小学校へ避難されている1,000人399世

帯への調査結果である。平均年齢は43.8才(最年少は1才、最高齢は92才)で70才以上の高齢者が90名いる。校区内の家族数338世帯、校区外57世帯、不明4である。(若松町からの避難者が少ないのは2号線を挟んで遠方だったためだろう)単身者が全体の1/3を占めており、また住民の80%の方が家屋の全焼・全半壊の被害にあっていて、仮設住宅に当たるまで真陽小学校で避難生活を希望している人が60%いる。

これらのことから「このことは避難生活が今後、長期化することを示しており、住民自治の確立が不可欠となってくるだろう。避難者の方々の最も切望しているのも仮設住宅への入居であり、しかも『現住居の近くに入りたい』という希望がお年寄りほど強くなっている。避難生活は不自由であるが、当面、衣食の両面では満足しており、本部・ボランティアの献身的な奉仕活動に感謝している避難者の想いが伝わってくる」とのコメントが述べられている。